

# 東総地域の千葉氏系武士団の研究

―東氏の信仰や文芸について―

樋口 誠太郎

## 一、千葉氏と東氏

現在の千葉県香取郡東庄町から銚子市の利根川下流域に至る利根川・黒部川流域低湿地と台地部のかなり広範囲の地域を中世に支配した武士として、東氏の名が知られている。東庄の名称は多分位置関係から来たもので、東の方の庄園という程度のことかと思われる。現在の東庄町という名称も、昭和三十年七月二十日に神代村、笹川町、橘村、東城村が町村合併したときに、当地域の歴史をふりかえりこの名称がよみがえったということである。

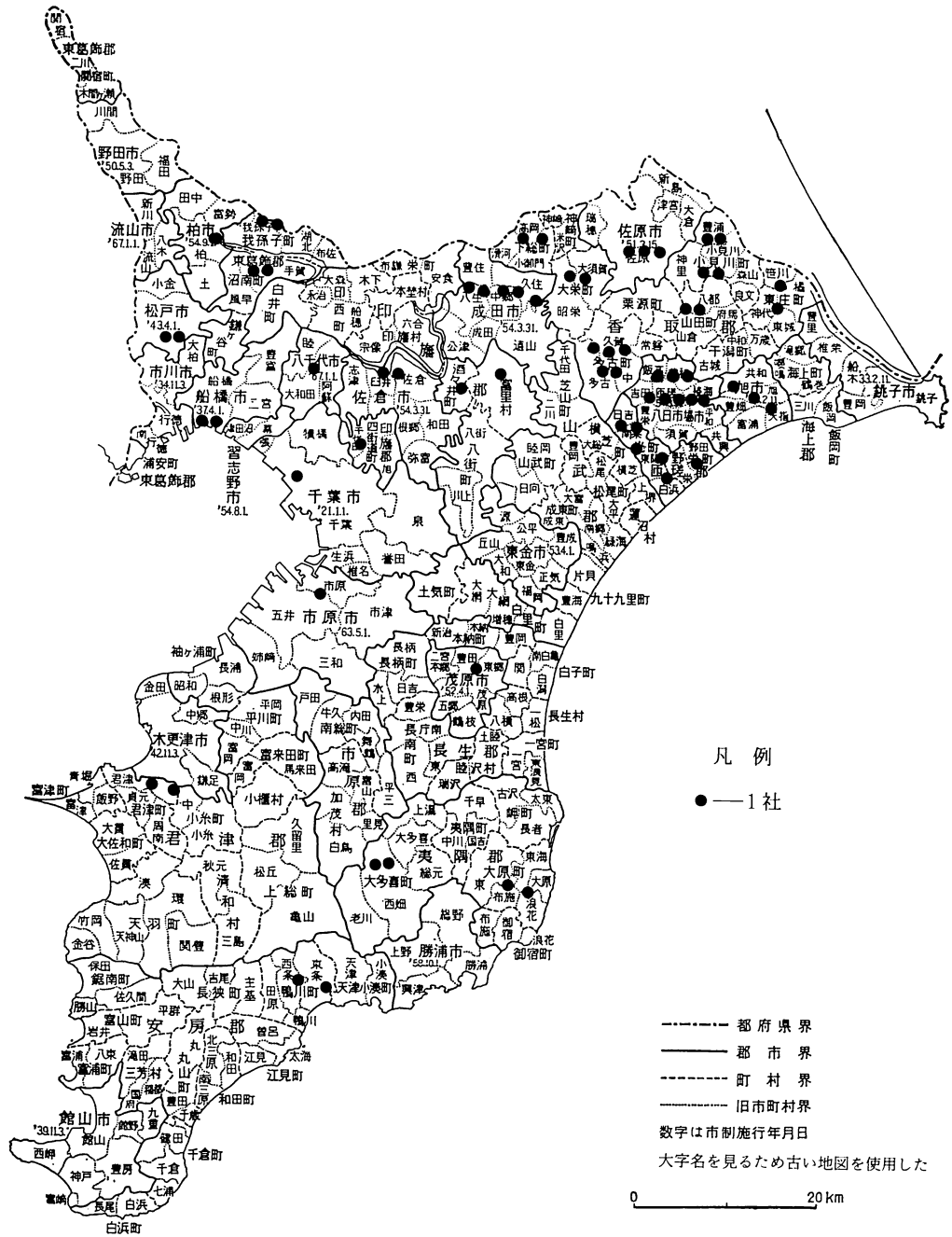
かつて、中世に千葉一門の東氏が此処を支配したが、東氏の姓も東庄から来たものであろう。その東氏というのには有名な千葉常胤の六男で、胤頼という文人武将が地頭となってこの地域に入ったもの

である。

ところで、千葉氏は一族あげて妙見尊を信仰していたことが良く知られている。千葉氏に見る妙見信仰というのは当時の千葉氏一門が共通して崇敬する尊像として妙見尊を対象にしていたのであるが、この信仰の特色としては尊像が小さく規模も屋敷神程度のものが多かった。しかし一方では尊像が小さいからと言って信仰心も弱いとはいえないという当時の神仏崇拝に対する考え方が背景にあった。ある面から見るとずっと後世のキリシタン信仰と良く似ている面も見られる。

尊像が小さいということは移動が簡単であるということの意味し、各地に展開しやすい素地をもっていた。千葉氏は祖先平良文の時代から妙見尊を信仰し、一門に広め同一守護神をもったその結束が後々千葉氏を強大化せしめたといつて良いであろう。

地図1 妙見尊又は北辰を祭神としてまつっている神社の分布



千葉常胤の時代に分かれていった子どもたちを見ると長男胤正が宗家を継ぎ、二男師常は相馬氏を名乗り、三男胤盛は武石氏を、四男胤信は大須賀氏を、五男胤通は国分氏を、六男の胤頼が東氏を名乗るのである。

また常胤の六人の男の子どものうち四人まで（長男と三男以外）が東総台地に入っていることは単にいい伝えだけではなく次に示した「妙見尊を祀る神社の分布」を見てもこのことが証明される。これは『千葉県宗教学人名簿』（千葉県総務部文書学事課）に記載されている妙見、北辰、星宮、将門、妙劍、星勝、などの名称をもつ神社の分布を調べたものである。

この他君津市の人見神社の様にかつて「人見の妙見」と言われて良く知られていたものは、ここに入れた。また、前述の様に妙見社は小祠が多く、家々や小集落単位で祀られていたものが多かったのでもうそれだけ身近かな存在であったと思われるが、明治末年に政府が行った「神社合祀」によって小さい妙見社はほとんどなくなっていた。したがって現在見られる様に神社としての数の上では大変少なくなってしまったが、分布でその傾向を見ると信仰の特色がうかがわれる。この妙見尊関係の分布区域こそが往時の千葉一門の勢力圏であったと言つてよいかと思う。

また千葉一門の妙見信仰は、合戦に於いては「軍神」として戦勝を祈願し、平時に於いては広大な下総台地に展開する牧に生育する

馬の守り神ともなっていた。『吾妻鏡』を見ると、千葉常胤父子やその一門と思われる人びとが鎌倉幕府の公・私に亘る行事に馬を献上している記事がいろいろと見かけられるが、これも千葉氏の領内に牧があり良馬が生産されていたからこそのことであろう。

福田豊彦氏は千葉氏関係の研究をされた和田茂右衛門氏の談として『千葉常胤』の中で「平忠常の子孫たちが相互にどんな関係を結んでいたか、残念ながらよくわからない。同じ妙見信仰をもち同族の意識を持つて外敵には連携したであろう。しかし常重がそうしたように、それぞれの所領内に妙見神を勧請した一応別個の行動体であった……。」と前置きして、「和田茂右衛門氏によると、忠常の根拠地の一つであったと思われる大椎（おほむね土気）では、各家の中で妙見神を祭り、妙見像には種々の型があるといわれている。こうした信仰や伝承の追求によって同族各氏に分かれ方や相互の関係もかなり明確になるのではないかと予想されるが、現在のところは不明といわざるを得ない。」と結ばれている。

右の文中に——各家の中で妙見神を祭り——とあるがこれは妙見信仰の特色ともいわれるもので、「城」などでも千葉一族の城であれば「城址」の中かその近くに妙見社か妙見祠があるので判ると言われている。

なお妙見尊の尊像も多種多様である。ここに全てをとりあげることはできないが事例として、尊像・懸仏型のものをあげた。



写真2 妙見像（室町時代の作か）  
東保胤氏旧蔵－東庄町公民館

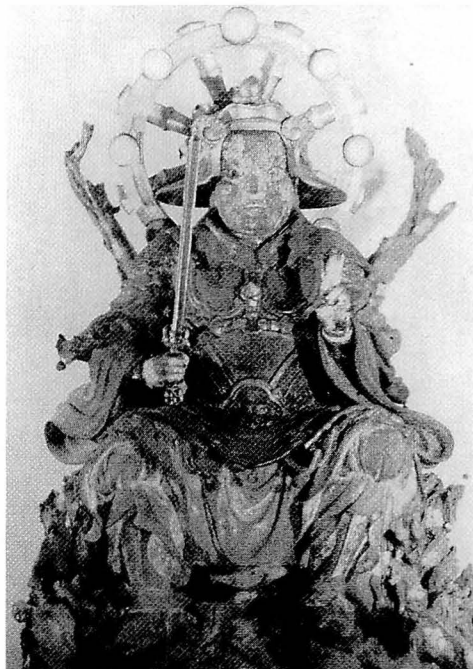


写真1 妙見像（伝鎌倉時代作）  
多古町妙光寺蔵  
（旧寺前高岡上の妙見堂に安置されていた。）

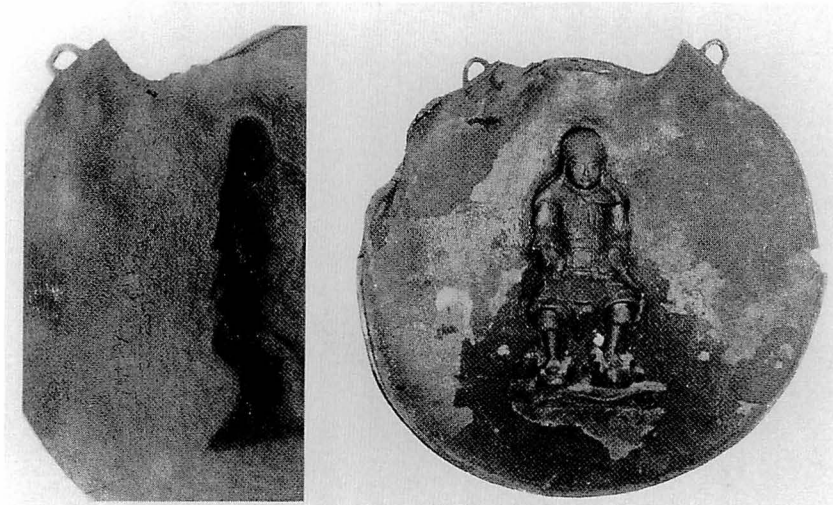


写真3 妙見像 懸仏（正安元年－1299 銘文）成東町

地図1、が示しているように東総地方は千葉一門の展開した土地であったことが現存する妙見社、北辰を祀る神社の分布でも推察できる。

このような千葉氏系の支族の中でも東氏は独特の発展をした一族であり、その存在が歴史上有名であったために比較的把握しやすく、ここでは、東氏を中心に中世における東総の千葉氏系武士団の変遷を妙見信仰や文芸（学芸）の面から探究してみることにする。

## 二、東氏の東総への展開

千葉常胤の六男と伝えられる胤頼は次の『吾妻鏡』の記事によると源頼朝の源家再興挙兵の最終的決断をせしめた人物のひとりと言つて良いであろう。

史料 『吾妻鏡』

治承四年庚子六月小

○廿七日戊申 三浦次郎義澄義明二男。千葉六郎大夫胤頼常胤六男等参<sup>一</sup>。向北条<sup>二</sup>。日来祇<sup>三</sup>。候京都。去月中旬之比、欲<sup>二</sup>。下向<sup>一</sup>之刻、依<sup>二</sup>。宇懸合戦等事<sup>一</sup>。為<sup>二</sup>。官兵<sup>一</sup>。被<sup>二</sup>。抑留<sup>一</sup>。之聞干<sup>レ</sup>。今遅引。為<sup>レ</sup>。散<sup>二</sup>。数月恐鬱<sup>一</sup>。参入之由申<sup>レ</sup>。之。日来依<sup>二</sup>。番役<sup>一</sup>。所<sup>二</sup>。在京<sup>一</sup>也。武衛対<sup>二</sup>。面件兩人<sup>一</sup>。給。御閑談移<sup>レ</sup>。刻。他人不<sup>レ</sup>。聞<sup>レ</sup>。之。

東総地域の千葉氏系武士団の研究（樋口）

## 要旨

治承四年（一一八〇）六月小廿七日

三浦義明の二男義澄と千葉常胤の六男千葉六郎大夫胤頼が京都よりの帰りに北条の源頼朝の所へ祇候し先月の中旬頃に下向したかったが丁度この頃宇治の合戦（以仁王の令旨をうけて源頼政が挙兵）がおこり官兵に止められ遅れて申しわけないとのこと、彼等は大番役で京都に行つての帰りであるとのこと、頼朝は兩人に対し、いろいろはなしをしていた。何をはなしたかは、他人（第三者）はこれを聞かなかつた。

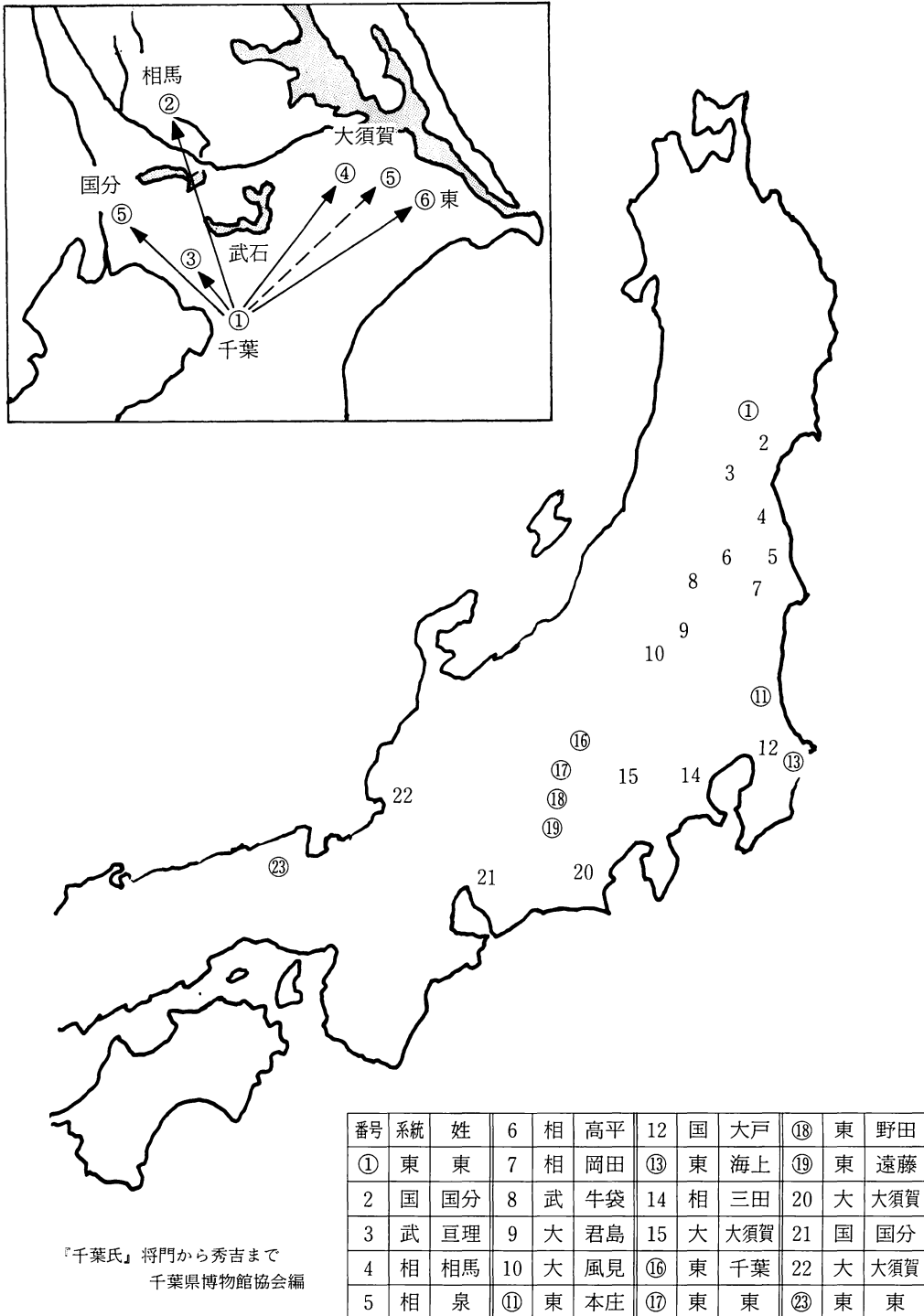
ということ、以仁王の令旨が出て以来の京都の情報をくわしく頼朝に伝え、頼朝もこの情報を判断材料にしたとみて良いであろう。事実源頼朝は源家再興を旗じるしにして、八月には挙兵している。

『吾妻鏡』に出てくる千葉六郎大夫胤頼こそ後の東氏の祖となる人物で「千葉六党」のメンバーのひとりである。次に揚げた「良文系両総平氏略系図」にも見られる様に胤頼は常胤の六男（末子）であるが、なかなか才気煥発の人物であつた様である。

『吾妻鏡』の治承四年九月九日源頼朝の命で、千葉常胤の居館を訪れた安達盛長の報告の記事中に盛長が常胤と対面したときに父に付き添っていた二人の子息として長男の胤正と末子の胤頼のことが出ている。

また同年九月十三日の千葉介常胤が一族を率いて出陣するに当た

地図2 千葉六党の分布にみる東氏の展開（○の中の数字は常胤の子息の順位を示す）



『千葉氏』将門から秀吉まで  
千葉県博物館協会編

小倉博氏作図

相馬氏・武→武石氏・大→大須賀氏・国→国分氏・東→東氏

つて胤頼が父常胤に、「当国の目代は平家方人也云々」と進言し注意を喚起し、常胤の命で小太郎成胤、胤頼が目代を攻めてその首級を挙げる手柄をたてたことが記されている。

源頼朝の拳兵から鎌倉幕府設立までの間で千葉常胤をたすけ、嫡子胤政、嫡孫成胤などと共に胤頼の活躍が多く記されている。鎌倉幕府設立にあたって、千葉常胤、上総権介広常、三浦介義明、北条時政等の源頼朝への協力は特記すべきものがある。なかでも千葉常胤とその一族の活躍について『吾妻鏡』の記事はかなりくわしくとりあげている。

胤頼のことも文治二年（一一八六）正月三日鶴岡八幡宮へ御奉幣の「埵飯」の行事を執行するにあたって胤頼と常胤が親子でありながら常胤の方がや、下座にすわった。これに対する説明が常胤は父であるといっても、六位である。胤頼は子であるけれども五位である。官位は君之授けるもので、胤頼は平家が天下をとっていた時代京都に行き遠藤左近将監持遠の推挙で鳥羽天皇の第三皇女上西門院統子に仕え従五位下に叙せられたことや神護寺の文覚上人について学んだ。頼朝拳兵にあたっては、父常胤にいろいろと進言し、兄弟六人中特に大功のある者であるとしている。『吾妻鏡』はこの外にも胤頼のことはいろいろととりあげている。

胤頼が下総国香取郡東庄三十三郷を領有する様になったのは上京して上西門院統子に仕えたことによると言われる。

東庄は千葉常胤の父常重が保延二年（一一三六）相馬郡と共に、下総国司藤原親通に没収された国衛領「立花郷」の後身で鎌倉前期頃までは橘庄といっていた。<sup>(1)</sup>

さらに胤頼は文治元年（一一八五）に父常胤が頼朝から拝領した<sup>(2)</sup>海上郡三崎庄五十五郷を併せて領有した。このことは同年十一月に行われた守護、地頭の設置と関連があつたのかも知れない。

千葉氏にとっては自分の一族に領有させるのであるから勢力の拡張という面ではこれほど安全な方法はなかった。事実下総国の北東部で利根川下流域低地部と台地部の香取郡東庄町・小見川町・山田町・干潟町（以上東庄又は橘庄）と銚子市・海上郡海上町、飯岡町（三崎庄）などの広範な地域に東氏と東氏の庶流が支配力を拡げていた。<sup>(3)</sup>

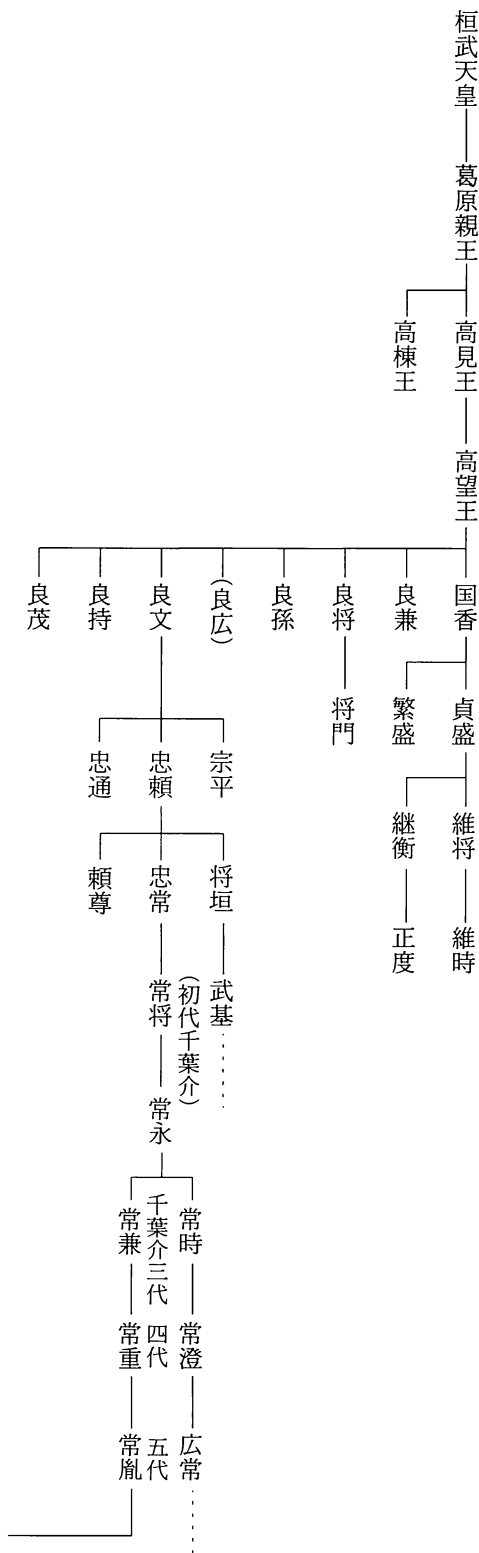
しかし平和裡にことが進展していったわけではなく、歌人として知られる東胤行（素暹）の二男義行の嫡子盛義は東庄上代郷に所領があり、さらに上総国周東郡や因幡国、奥州などにも所領があつた。しかし東庄上代郷の三分一が後に武蔵国金沢称名寺領になってしまふ。執権北条氏とその系列にある金沢北条氏の圧力により没収されたものであろう。似たようなことは上総国周東郡内の村々でもおこっている。そのため東氏と金沢称名寺の間で紛争が続いている。<sup>(3)</sup>

一方東氏の宗家の方は承久の乱がおこったとき（承久三年一一二二）胤行の戦功によって、美濃国郡上郡山田庄（現大和町）を与

えられ胤行は当地に移った。東庄・三崎庄など東総地方は執権北条氏の所領と指呼の間に位置しているので、三代將軍源実朝との関係が深かった胤行にとって離れるのが良策と考えていたのかも知れない。結果としては前述の様に孫の盛義が所領維持に苦心したことが証明している。このあたり東氏がどうして美濃国へ移ったかという理由は現時点では良く判らない。文芸（歌道）の面からその本場の京都により近い美濃国に移ったのではないかと言うことも考えられるが、そのことを具体的に証明する史料は見当たらないので今後の

課題となろう。  
しかし東氏宗家が胤行の代に美濃国に移ってから全く東庄と無関係であったのではなかった。この事は、はるか後世に第十六代千葉介胤直が馬加康胤のために亥の鼻城を襲われ香取郡の多古で父子ともども自害する事件が康正元年（一四五五）におこり下総国が乱れると美濃国にいた東常縁は当時の室町將軍足利義政の御教書をお願い直ちに房総へやってきて、馬加氏や原氏を攻撃する例などに良く現れている。

表1 良文系 両総平氏略系図（「神代本千葉系図」等より 千葉宗家と東氏の系図を抽出）







次の地図1を見ると東氏は単に東総に展開してただけではなく歴史のながれと共に、いろいろな土地に根をおろしていることがわかり、なかでも美濃国東氏と言われるほど美濃国にその存在が顕著である。したがって東庄を支配していた東氏という土地と結びついた「姓」をもつ「在地の武士」的なイメージをもつ武士とは本質的に異なっている点に注目すべきで党的構成が強く打ち出されてどこへ行っても自分は千葉一門という意識があつた称である。

### 三、承久の乱と東氏

承久の乱は、承久三年（一二二二）に鎌倉幕府が弱体化しているだろうとみられた後鳥羽上皇が執権北条義時追討の院宣を発せられたことに端を発した争乱であり、北条政子（源頼朝夫人）が参集した鎌倉の武士たちに熱弁をふるい武士たちをあげましたことは、良く知られている。

東中務丞胤行もこの時の戦功で美濃国郡上郡山田庄を与えられた。

『大和村史』によれば「宣陽門院新御領目録」（島田文書——東京大学史料編纂所）と言う史料で東氏が山田庄を与えられて郡上郡山田庄に入る以前のことを調べると宣陽門院（一一八一〜一二五二）は後白河天皇の第六皇女で、新御領とされる山田庄は鳥羽天皇の第二皇女上西門院（一一二六〜一一八九）の所領であり、それを宣陽

門院に進上されたことがわかる。したがって承久の乱当時山田庄は皇室領であつたことになる。

また上西門院といえ、その昔東氏の先祖六郎大夫胤頼が仕えた方でもあり、その所領が東胤行に与えられたのも偶然であろうか。

史料 宣陽門院新御領目録（島田文書）

⑧ ————— ⑨

新御領 自上西門院被<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>之

山城国市辺庄 同国相井庄

同国銭司庄 河内国池田庄

摂津国久岐今福御厨 伊勢国高忠御厨

同国御炭山庄 同国里部御厨

尾張国宮吉御領 同国勅旨田

上総国玉崎庄 近江国吉田庄

同国筏立庄北 美濃国山田庄上

同国大樽庄 下野国那須庄上

能登国土田庄 越後国福雄庄本

（略）

⑩ ————— ⑪

（略）

已上待賢門院御時寄進三之一

諸仏護念院不斷念仏所上西門院御祈禱所第

伊寿院實成僧正寄進之撰津国神雄寺能算被寄進之飛太国賀□寺寺僧寄進之、参川

国平尾社本庄（寄進之）。

同国稚鯉鮒社

已上殷富門祈禱所

㊦

伊豆国清湯覚寺元応三年八月十日沙弥蓮意、刑部五大院業

康等寄進之。

（『大和村史』）

東氏関係の系図の胤行に関する処を見ると承久の乱の戦功で美濃国郡上郡を与えられたとあり、美濃国に承久年中に移ったとされている。承久の乱は承久三年（一二二一）におこり承久という年号は三年でおわりであるので胤行が美濃国郡上郡山田に移ったのは承久三年ということになるが宝治二年九月胤行は鎌倉殿の「御教書」を書き右筆になっていたのでおかしい。

東氏は胤行のときの承久三年に大きな変化をむかえるが宗家は美濃国へ移ったかどうか判らない胤行の弟胤方は下総国海上郡を与えられて海上次郎と号する（『千葉大系図』）。また胤方の弟胤久は海上四郎と号した。その下の弟胤有は海上五郎と号し森戸の領主となった。

血縁的武士団が惣庶に分かれ小集団を結成するのを党と言っている

東総地域の千葉氏系武士団の研究（樋口）

㊦

るが、千葉常胤の六人の子どもが分流して作りあげた「千葉六党」は、良く知られているが、この党は千葉氏の場合、常胤の子どもたちの時代でおわりになったのではなく、東氏の場合のように分かれた先で更に成長して党ができあがっていくものもあつたようである。胤行は弘長三年（一二六三）七月二十六日に八十五才で歿するが美濃国郡上郡山田庄に移り住むのは晩年のことで、胤行と歌道の上で親交のあつた後嵯峨天皇の第一皇子宗尊親王が親王将軍の初めとして鎌倉に下向される建長四年（一二五二）ごろから後のことではないかと推察される。

『千葉大系図』によると胤行には、泰行・義行・行氏・顕信・秀元の五人の男子があつて泰行が本領の下総東庄を継ぎその次の女子は上総権介秀胤夫人となつた。秀胤は宝治元年（一二四七）三浦泰村と北条時頼の謀略にかかり一族ともども館に火をかけて死ぬ。二男義行は東次郎と号し鎌倉將軍に仕えた。三男行氏は東二郎左衛門入道といひ法号を素源と称し、その詠歌は「続拾遺集」・「続千載集」・「続後拾遺集」・「新千載集」等にみられ、「濃州郡上郡に居城す」とあり、彼が美濃東氏を継いだことはほぼ間違いないであろう。行氏の後を継いだのは嫡男の時常で『千葉大系図』には「東中勢丞、法名素阿弥、阿千葉住……」などとある。『大和村史』の系図編中の郡上郡美並村乗性寺所蔵の「東家系図」をみると「法名素阿、文和元年（三三二）四月三日」とある。しかしこの時常の子、氏村が詠んだ和歌が『続

東家 歌道血脈傳 (千葉県香取郡東庄町宮本区) 東 保胤氏蔵  
(部分的に掲載)

大職冠 (鎌足) — 正二位内大臣 — 不比等 — 二位大政大臣 — 房前 — 大政大臣 — 真楯 — 正三位大納言 — (中略) — 道長 — 大政大臣 — 頼通 — 頼宗

長家 — 正二位権大納言・号御子□ — (中略) — 道家 — 從五位下散位・母從三怒子近江守高雅女 — 和歌達人・歌仙一派相統秀詠有・旧書・長曆二四月八日卒

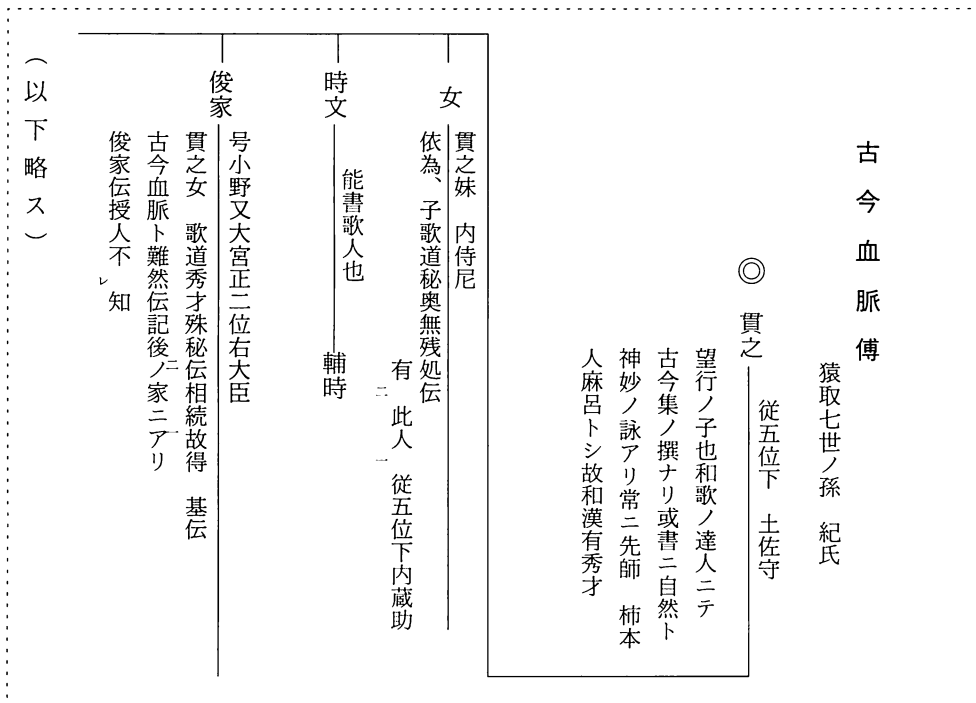
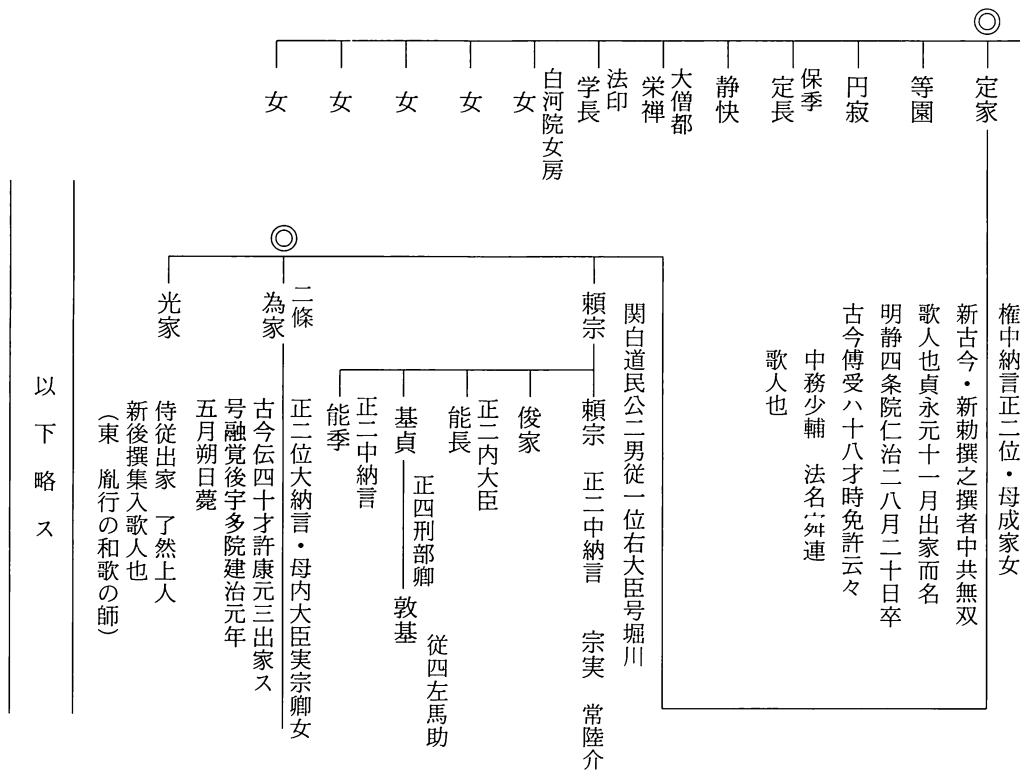
母威明親王女・康平七十一年九月九日電寿六十 — 忠家 — 正二位大納言 寛治四出家同五年五十九薨

祐家 — 正三位中納言

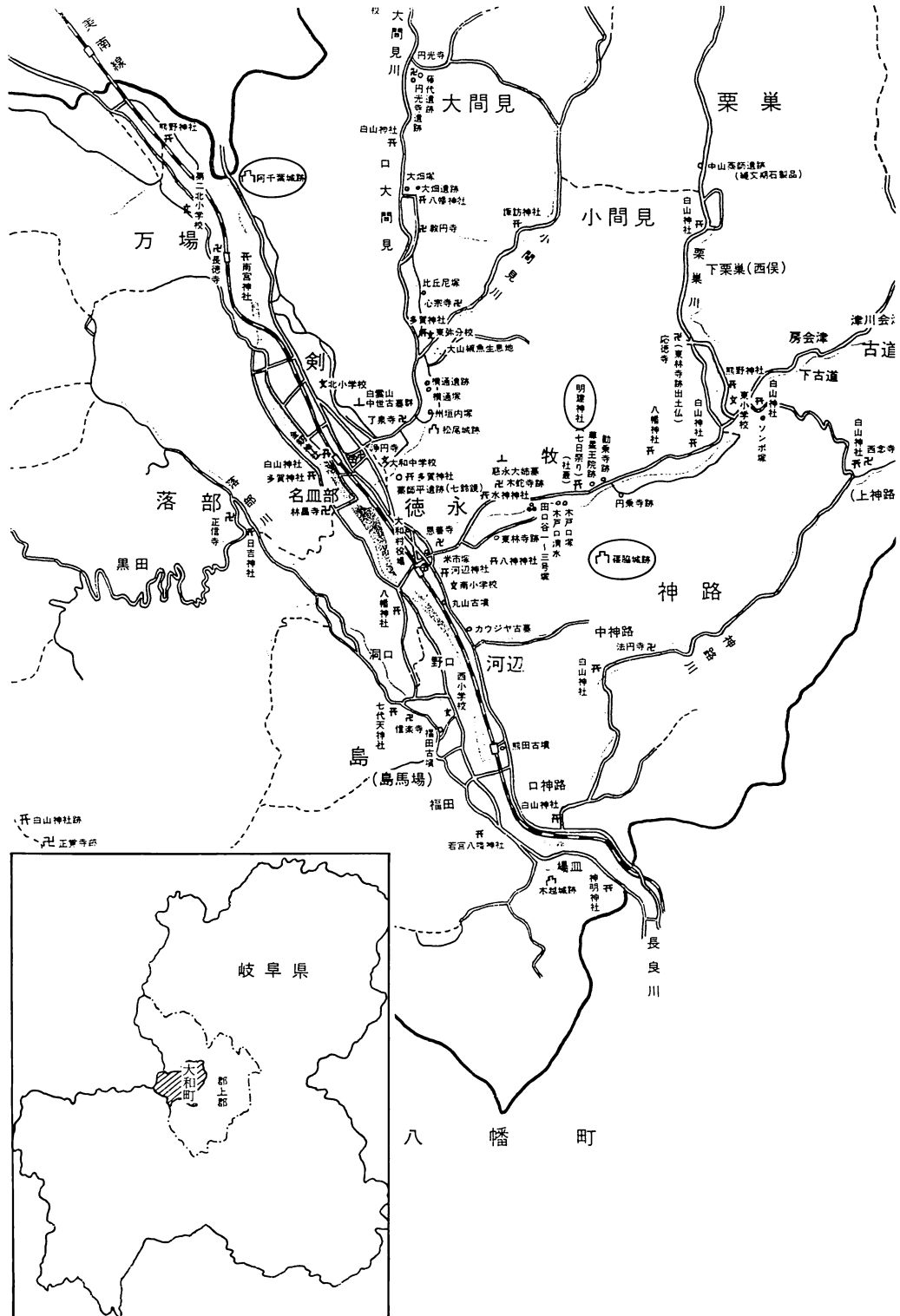
◎ — 基忠 — 從二位中納言 — 信忠 — 左兵衛介 — 忠成 — 正五位下 少納言号大炊御門 — 光能 — 參議正三位  
俊忠 — 從三位中納言 — 母伊与守藤原敦家女 — 忠定 — 從五位下刑部大輔 — 覺興 — 薬師寺別当  
頭良 — 保安四七月五十三 号二條 — 公長 — 散位御子左左衛門督 — 俊定 □□□

◎ — 俊成 — 皇太后宮大夫・五条正三位 — 平治三九廿依 後白河院宣 千載集  
俊定 — 東宮学士 — 遁世已後撰者准喜撰和歌或  
快修 — 大僧正 — 本名頭広号 御子左 正三歌依  
禅知 — 法師 — 母頭隆女  
仁助 — 仁阿闍梨 — 千載集撰者ノ和歌秀才始頭輔  
寛豪 — 同歌人 — 養子後者基俊門弟

正三位兵部卿 — 成家



地図3 岐阜県郡上郡大和町 東氏関係地(大和町史)



東総地域の千葉氏系武士団の研究(樋口)

千載集』十九に見られ「平時常みまかりて後、常にかきかわしける文のうちに、経を書きて、人の許よりおくられければ、心だに通わば苔の下にてもさぞな哀れとみずくきの跡」とありこの『続千載集』が成立したのは元応二年（一三二〇）で時常の死は、これよりも以前のことになるのは当然で文和元年（一三五二）では合わない。『大和村史』は『東氏遠藤家譜』に見られる「正和元年（一三二二）王子四月三日」説が良いとしている。

胤行の時代、承久の変の戦功によって美濃国郡上郡山田庄を与えられた東氏は、ここへ移りその後美濃国東氏として当地で目ざましい文化活動を展開し、本領の下総国東庄の東氏は次第にかげがうすくなっていつてしまった。

#### 四、東氏の文芸

鎌倉武士といえば無智蒙昧と都の公家にバカにされる者が多かった。事実知性の欠如から発生した鎌倉の「まちなか」の騒動は少なくなかった。十三世紀始め頃に書かれた北条重時の家訓を見れば当時の武士が一般的にどんな行動をとっていたのが判る。勿論文字が満足に読めるものもすくなかったであろう。それが改まるのは矢張り鎌倉時代も中期頃からであろう。

こうした武士たちの中にあつて、和歌を詠み都の公家からバカに

されない武士もいた。その展型的な武士のひとりがかき常胤の六男千葉六郎大夫胤頼で後の東胤頼であった。

胤頼に本来その様な素地もあつたのであろうが都に行つて上西門院に仕えたり、文覚上人に師事したりして学んだことがそれに「みがき」をかける結果となつた。また胤頼個人だけが突出して歌道の才能に恵まれたのではなく代々歌道にすぐれた人物が出ている。

その例を二、三見ると東胤頼の嫡男重胤は兵衛尉三代の将軍に仕える。エピソードとして建永元年十一月十八日『吾妻鏡』の記事に「東平太重胤が下総国より参上する。彼は將軍実朝の無双の近仕である。けれど暇をもらつて下総国に帰つて何ヶ月しても帰つて（鎌倉に）来ない。將軍実朝は歌を詠んで届けて暗に帰つて来る様にとりからはからおうとしたがそれでも顔を見せなかつたので実朝は機嫌を悪くしてしまつた。」とあり同二十三日の記事には、重胤が困つて北条義時に相談するとそんなこと「しよつちゅう」だ、このようなわざわざいは宮仕の習である。あなたの場合は歌を詠んで將軍に差し上げたら良いと言われたので早速そのようにしたところ將軍実朝の不機嫌はたちまちなおつてしまつたという。

また建久六年（一一九五）八月十六日鶴岡社頭で行われた放生会の流鏑馬に優秀な弓の射手十六人が選出された。その中に四番射手として重胤の名が見られる。このことは牧馬の地で育つた重胤は単に歌道の名手というだけでなく射芸にもすぐれていて「文武両道

の達人」であったことを示しているといつて良いであろう。

しかし承久元年（一二一九）正月二十七日夜、鎌倉に七十センチ近くの雪が降った。三代將軍源実朝はこの日右大臣拝賀のため鶴岡八幡宮に行き一千騎の隨兵の中には重胤も加わっていた。二代將軍頼家の遺子で鶴ヶ岡八幡宮別当阿闍梨の公暁くわんぎょうが実朝を暗殺したのはこの時のことである。重胤の心境はどんなものであったのであろうか。やがて彼は幕府に仕えるのをやめて出家し竟然と称した。『大和村史』に掲載されている乗性寺所蔵の「東家系図」日置吾郎氏所蔵の「東家系図」も重胤の歿年は「寛元二甲辰歳（一二四四）四月十二日下総国卒」と記している。

また重胤の嫡男東胤行もすぐれた歌人であった。彼は藤原定家の子藤原為家から歌道の奥儀を学び妻は為家の娘であったとも言われ藤原定家と源実朝は歌道の上では師弟関係にあるので、胤行は実朝の側近として目をかけられた。

『続拾遺集』の中に実朝ととり交わした和歌が掲載されている。

素暹法師物へまかり侍りけるにつかわしける。

鎌倉右大臣

沖つ浪 八十島かけて すむ千鳥

心ひとつに いかがたのまむ

返し 素暹法師

浜千鳥 八十島かけて 通ふとも

住み来し浦を いか忘れむ

また『吾妻鏡』建保六年（一二一八）十一月廿七日条に「東平太重胤は無双の近仕なり其の男（嫡男）胤行も父（重胤）に並ぶ者であるが先般下総国海上庄に下向し久しく帰参せず、將軍家御書をつかわして早く帰ってくるよう催促する。此のついでに次の歌を詠んで、送った。

恋しとも思はでいはば 久堅の

天照神も 空にしるらん

『吾妻鏡』をくわしく調べたわけではないが、歌道にすぐれていて、將軍から和歌をおくられた武士は胤行ぐらいのものではないだろうか。

なお香取郡東庄町宮本区の東保胤氏所蔵の『東家歌道血脈伝』を見ると次の様になっている。全てを掲載するわけにはいかないのでも部分的に、藤原氏系二条流の歌道と東氏の関連を示しておく。地方に残っているこの様な史料は非常に興味をひきつけられる部分もあるが他の面では、厳密な比較考証が必要だ。その点此処にあげたものも十分とは言えないと思うが参考までに掲載しておく。



## 五、まとめ

「香取の海」といわれた地域に接する東総の荘園地帯に千葉常胤の六人の男子が所領を与えられて展開し、「千葉六党」と言われ、その後大きな力をもつ様になるのは良く知られていることである。

東国では三浦党とか武蔵七党とか武士団の同族協同体をあらわすときに、この「党」ということばが用いられている様である。平素はそれぞれ別個の地域にいるが何か事がおこったときには、同族意識を発揮し協力して敵にあたるものである。

しかし、平素も同族意識をつねに保持することが必要で、武士団の歴史が古ければ古いほど同族意識が薄くなっていくのは自然のなり行きとも言える。そこで千葉氏の場合その一族の間に妙見菩薩を信仰することが行われていた。妙見信仰は星の信仰で北極星（又は北極星を含む七斗七星）が不動であることから来たもので、本来は大陸又は砂漠の民の信仰であるともいわれている。我国へは古代の渡来人によってもたらされたものと推察される。千葉氏が妙見尊を信仰する様になった契機は平良文の時代におこった平将門の乱であると縁起絵巻などには記されている。また千葉は牧まきの発達した地域で、千葉常胤などは源頼朝に良馬を献上している。この様なことが妙見尊と千葉氏を結びつけたと思われる。またそのほじまりに、大

陸系帰化人の影響があるかとも思われる。

妙見尊を本尊として千葉氏が建立した「氏寺」は各地に残っている。また明治維新の時の「神仏分離令」によって寺か神社かと迫られ、神社への道を選び妙見尊はないがしろにされてしまったという例もある。

千葉氏の所領の多かった東総地方にいかにも妙見信仰が多かったかは「一」に記したとおりで、東氏も強烈な妙見信仰をもち、美濃国郡上郡山田庄へ惣領家が移るとき千葉より妙見を勧請した。また「明建」と文字は異なるが妙見尊を祭神とした神社もある。

東氏のことについてふれるとなれば、強いばかりで粗暴な傾向のあった当時の「鎌倉武士」の中で、東氏初代の六郎大夫胤頼以来文芸の道に秀でて、都の貴族の間に入って和歌を詠み、後世「古今伝授」で知られた東氏は当時の武士の中では異色の存在であった。このことについても、もう少しくわしくふれる必要があると思うが、「東総武士団の中の東氏」ということで概論的にふれるにとどまることが他の武士団には見られない文芸活動を中心にとりあげてみた。

### 註

- (1) 『県外千葉氏一族の動向』・12頁（千葉市立郷土博物館）
- (2) 『吾妻鏡』文治元年十月廿八日条（国史大系・吉川弘文館）
- (3) 『県外千葉氏一族の動向』・13頁（千葉市立郷土博物館）

参考文献

- 『中世武士団と信仰』奥田真啓 柏書房  
『妙見信仰調査報告書』・平成四年三月千葉市立郷土館  
『大和村史』 岐阜県郡上郡大和村  
『千葉史学』 第一六号  
「室町前期における千葉氏の権力構造についての一考察」  
『東氏歌道血脈傳』東庄町宮本区東保胤氏藏  
『千葉常胤』福田豊彦人物叢書・吉川弘文館